

『往来』 砂盃富男 (⇔) 萩野美穂

この展覧会は、群馬－砂盃－萩野の順で着想された。

何故群馬かという、単に筆者が学芸員となってから大阪に来るまでの10年のうち7年ほどを群馬で過ごしたことによる。群馬の美術館（ハラミュージアムアーク）は公立ではないが、そこで私は全国的・国際的視野と同時に、美術（館）の活動が地域に根ざしていることの重要性を痛感させられた。また、中央（東京）と「地方」という日本的な関係に興味を持つようになった。その後筆者は大阪に移って来たが、大阪は中央でもあり同時に地方でもあるといえる。

そこで、対東京や大阪-関西-全国という図式から離れ、大阪と他の特定の地方を一對一で向き合わせるような発想で、大阪からはなれた地方の現代美術を紹介するのも意義あることでは、と考えた。それでまず自分が体験的によく知っている群馬を取り上げることにした。

群馬県は保守的な土地柄ではあるが、優れた活動している現代美術作家は決して少なくはない。では、実際にどの作家にお願いするか。もちろん包括的に取り上げるのは無理があり、またそれは他に適任者がいるはずである。キャズの「実験的な活動をしている作家」という考えからすれば、中堅・若手の活動盛んな作家を選ぶべきだが、優れた作家達から一人か二人にしぼるのは難しく、またこの企画がシリーズでない以上、誰に決めても不公平な気がした。そこで、それらの作家と交流がありつつも距離をおいてどのグループにも属さない1、そして少々異色の作家として、砂盃富男こそ今回紹介するのにふさわしい作家ではないかと思った。彼のよく用いる「無償性」という言葉も非営利のキャズには似合っている。彼は一昨年の春に急逝しているが、それを非常に残念に思う気持ちが筆者にあったことも影響している。特に彼はコレクターという面がよく知られていて、それがかえって作家としての側面を見えにくくしているような感もあり、その死によって「作家・砂盃富男」が風化し、或いは数十年前の地方美術運動に押し込められてしまうのではないか、という筆者の危惧が今回彼を取り上げさせたともいえる。

つまり筆者は彼を現在活動しているライブな作家として取り上げたかった。とすれば、「砂盃富男回顧展」にするのが最適かどうか疑問が残る。それはまた、群馬の公立美術館の学芸員がすべきことであって、前職において「郷土の美術・美術史」を扱う立場になかった筆者がそれをするのは僭越でもある。勝手な想像かも知れないが、むしろ若い作家に刺激を与えるような企画の方が彼も喜ぶのではと考え、今回のような、若手作家に砂盃作品を展示する空間を制作してもらおうという形を試みることに決めた。

そのしばらく後、筆者は今回の企画とは関係なく萩野美穂と話す機会があった。その時点では萩野にお願いすることは実は全く考えていなかった。が、話題がキャズのことになった時、軽いノリで、「キャズで展示したい？」ときいてみたところ、結構真面目に考えてくれているようだった。そこで彼女の作品について改めて考えてみると、筆者が評価し、印象に残っている作品は、ある人（失踪者）の「不在」をテーマにしたもので、不在者の「いない」面ではなく「いる」という面を取り上げている点が好ましかった。また、彼女はこの時点でアメリカに行くことが決まっており、もし彼女を取り上げれば、出品作家が二人とも会期中に留守ということになる。これは意外に今回の企画に合っているのではと思い、自分の考えを話してプランを考えてもらうことにした。最初すぐ出てきた案は全くよくなかったが、次の少し時間をかけた案は行けそうだったので彼女にお願いしようかと思った次第である。10月下旬、離日直前の萩野を群馬のアートギャラリーミューズ（彼の作品を預かっている）と、小さな美術館でもあった砂盃邸に連れて行き、実際に展示する作品を選んだ。筆者は今回の企画を個展でないと決めた時から、作品点数はごく少数、場合により一点に絞り込んだ方がより作家

の存在が際立つであろうと思っていた。また、萩野のアイデアも砂盃作品は一点の方が効果的と思えたので、かなりの数の中から、これぞというただ一つの作品を選ぶ作業となった、最初、夫人の砂盃次代は一点のみの展示に驚いた様子だったが、こちらの考えを話すと納得してくれた上、萩野が作品の額の銀箔貼りをお願いした時も快く引き受けてくれた。この群馬行は強行軍ではあったが、企画を現実のものとする上で大きな前進となった。

今回の展示では、観る者はまず、宙吊りにされた、萩野の手による装飾的なフレーム越しに砂盃作品を見ることになる。しかしそれではよく見えないので、観る者は次に砂盃作品に近付いて、「繊細な青のミクロコスモス」というべき作品世界を堪能することになる。そこで振り返ると、萩野のフレームは両面に装飾が施されていて、その向こうに観る者自身が不在となった空間が浮かび上がる。このことにより、観る者は同時に作家から観られる存在であることが示される。

ところで、砂盃作品の題は「私の瞳は闇のなかにある」である。このタイトルをもとに今回の展示方法を考えたと思われるかも知れないが、実はこれは偶然の一致である。萩野と筆者は、群馬で作品タイトルを知った時、驚くと同時に企画の方向が間違っていないことを確信した。萩野美穂はまだまだかけ出しの作家である。作品に興味深い何かはあるが、今後どうなっていくかは未知数である。願わくは、彼女の前途に天国の芸術家からの暖かい加護があらんことを！

大阪市近代美術館準備室学芸員 三井 知行

roudabout ISAHAI Tomio HAGINO Miho

往来 砂盃富男⇄萩野美穂

curator : 三井知行 MITSUI Tomoyuki (大阪市立近代美術館建設準備室学芸員)

特定非営利法人キャズ

特別協力 : 砂盃次代

協力 : アートギャラリーミューズ

企画支援 : 蜷川敦子 林泰子

2003年1月27日(月)～2月27日(木)

1:00pm～7:00pm 月曜～土曜 Open (日・祝休)